公益財団法人
知床自然大学院大学設立財団

会報第 25号　2022.3.1

Public Interest Incorporated Foundation for Shiretoko Institute of Wildlife Management

設立財団ニュースレター

Vol.25

2022年 3月1日発行

知床ネイチャーキャンパス・リカレント2022

2/5～6日に、オンライン講義を開催しました

2022年2月5日（土）、６日（日）、「知床ネイチャーキャンパス・リカレント2022」のオンライン講義を開催しました。ネイチャーキャンパス初の社会人向けプログラムで、全国からさまざまな職種の42人が参加。知床が世界自然遺産登録にあたって取り入れた科学的保護管理について、10人の講師より、さまざまな角度からの講義・ディスカッションが行われました。
現地実習・演習は６月11日（土）、12日（日）を予定し、すでに定員に達しています。

日　時：2022年2月5日（土）13：00～17：20
　　2月6日（日）10：00～16：20
方　法：オンライン（Zoomによる）
参加者：42人
　　環境省や林野庁、都道府県、市町村職員のほか環境コンサルタントや環境NPO、民間会社などさまざまな職種の方にご参加いただきました。

講義内容詳細は次号のニュースレターでご報告します

★プログラムと講師（敬称略）

【第1部　知床の保護管理体制】
1-1　知床世界自然遺産からの出発
（渡辺綱男・自然環境研究センター上級研究員）
1-2　知床世界遺産地域管理体制の現況
（渡邊雄児・環境省釧路自然環境事務所ウトロ保護官事務所）

【第2部　科学的管理システムの構築とその理論】
2-1　管理体制構築と科学委員会が果たした役割
（桜井泰憲・北海道大学名誉教授）
2-2　モニタリングと順応的管理
（松田裕之・横浜国立大学大学院環境情報研究院教授）
2-3　知床エコツーリズム戦略と合意形成システム
（敷田麻実・北陸先端科学技術大学院大学教授）

【第3部　科学的保護管理の実際と現地業務の展開】
3-1　エゾシカ個体群管理による植生回復
（宇野裕之・東京農工大学大学院農学研究院特任教授）
3-2　河川工作物の改善による生態系復元
（中村太士・北海道大学大学院農学研究院教授）
3-3　ヒグマと利用者・住民のマネジメント
（石名坂豪・公益財団法人知床財団 主任研究員）
3-4　利用調整の実際と資源価値・満足度の向上
（秋葉圭太・公益財団法人知床財団 公園事業推進PL）

【第4部　総合質疑とディスカッション】
4-1　総合質疑とディスカッション
（コーディネーター：梶光一・東京農工大学名誉教授）

2021年9月9日(木)開催　知床ネイチャーキャンパスpresentsオンライントークセッション

知床で生きる、働く―地域の自然と人をつなぐ活動とは？

2021年9月9日（木）、当財団は、知床で自然と人をつなぐ活動を行っている3人をスピーカーに迎え、オンライントークセッションを開催しました。前号で概要をご報告しましたが、今回は３人それぞれの発表と、敷田麻実・北陸先端科学技術大学院大学教授がコーディネーターを務めた３人のトーク、さらには参加者アンケート結果について、内容を一部ご紹介します。

日　時：2021年９月９日（木）19:00～21:00
方　法：オンライン（Zoomによる）
参加者：51人（学生30人、社会人21人）

スピーカー：村上晴花さん（北こぶしリゾート経営戦略室）
秋葉圭太さん（公益財団法人 知床財団）
三浦一輝さん（斜里町立知床博物館）
コーディネーター：敷田麻実さん
（北陸先端科学技術大学院大学教授）

村上 晴花 さん

大阪府豊中市生まれ。酪農学園大学に進学し、ヒグマを研究する野生動物生態学研究室に所属。大学４年時、アルバイトで滞在した知床の景色に惚れ込み、ウトロ地区で宿泊施設を３施設運営する北こぶしリゾートへの就職を決める。
現在は広報・CSRを担当し、クマ活の中心メンバー。個人の活動として、知床ゴミ拾いプロジェクト代表を務めるほか、知床五湖でのネイチャーガイドも行う。

トーク1　村上　晴花　さん

■ 駆除や事故の一歩手前でアクションを ■

今の活動についてお話します。まず北こぶしリゾートの地域貢献活動「クマ活」です。知床半島はヒグマの高密度生息地で、ヒグマの姿が一目見たいとクルーズ船に乗ったり、森を歩いたりするお客様が大勢います。いわばヒグマが観光資源になり多くの方を楽しませている反面、人とヒグマの軋轢もあります。ヒグマに慣れていない観光の方が餌をあげてしまうと、ヒグマも餌が欲しいと人に近づいてしまい最終的にヒグマが駆除されてしまうことが、最近の知床で恒常的になりつつあります。クマ活はヒグマが駆除される、人身事故が起こる一歩手前で何かアクションを起こせないかという思いで始まっています。

具体的には草刈りとゴミ拾いをしています。ウトロは人口1500人ほどの小さな町で周りが森に囲まれており、森に住むヒグマは町の周りにある背丈の高い草むらを通じて住宅地に近づいてしまいます。その草むらを人の手で刈ることで見通しが良くなると、ヒグマは通りにくく街に入り込むことがなくなると言われています。先日はゴミ拾いをしました。管理されていない場所に生ゴミなどがあるとヒグマがくわえてしまい、これは美味しい、もう一度食べたい、と思ってしまいます。そういったものを拾うことで、ヒグマと人との間にしっかりと境界線を引くことができると考えています。合わせてSNSやブログに活動のことをアップし、多くの人にヒグマとの軋轢やそれを頑張って解決しようとしている人がいると伝えていければ、より解決につながると思い活動しています。

個人では、2020年５月に台湾出身ガイドのランさん（藍屏芳さん）と一緒に「知床ゴミ拾いプロジェクト」を始めました。知床は世界遺産といえど道端にゴミが落ちていますし、海洋ゴミが集まりやすい地形をしていることも活動を始めてから知りました。海岸線を少し降りると、網やロープなどの漁具が転がっていますが産業廃棄物は私たちの手で処理できません。また、生ゴミのような、野生動物に影響を与えてしまうゴミもいくつか確認されています。10年後くらいにはゴミ拾いをしなくてもいい知床になればいいと考えながら、月に一回ほどゴミ拾い活動を行っています。2020年だけで延べ約170人にご参加いただきました。

■ 動物に対する価値観は人それぞれ ■

個人的に、知床五湖でガイドもやっています。ガイドは人と自然をつなぐ最前線。私はホテルで多数のお客様の相手をしますが、ガイドは多くても20～30人、少ないと一対一でお客様と一緒に自然を楽しみ、時間を共有することができます。クマ活やゴミ拾いプロジェクトの活動を活かしながらお話し、お客様の声も直接聞くことができる貴重な機会です。

コミュニケーションで苦労したエピソードはありますか？という質問をいただきましたが、親譲りかつ関西出身なのでコミュニケーション能力が元々あって…。言葉にしてしまえ！という感性で活動しており、物事を進める中でとてつもない衝突は今のところないと思います。私一人の活動ではないのでたくさんの方に相談し、パワーを分けてもらいながらやっています。印象に残っていることが一つ、伝えることの難しさを感じたことがありました。例えば知床ではドライブ中にトコトコとヒグマが道路に出てくることがたまにありますが、危ないので車から降りてはいけません。そのような私からのスタッフトークの話を何回か聞いてくれた人が、「この前ヒグマを見て思わず車停めて降りちゃったよ、後ろの人にも教えてあげたよ」と笑顔で言われました。３年ほど前の話で、お客様は悪気なく教えてくれましたが、私が伝えたいことはなかなか伝わらないのだなと悔しい思いをしました。

そこで感じたのは、動物に対する価値観は人それぞれだということです。ペット、愛玩動物の延長線上で可愛いイメージを持っている人もいれば、ヒグマに関しては人を食べる恐ろしい動物だとイメージする方も多い。ただの被写体と考える人もいます。「野生動物をひっくるめた自然環境を守らなければいけない」という私にとっては当然の思いを一方的に押し付けるのではなく、いろいろなことを話しながら伝え、最終的には一緒に守っていきたいよねと共感するには、まだ力不足だと感じているところです。

秋葉　圭太 さん

2005年立命館大学大学院修了後、山梨県庁に勤務。09年より知床財団に勤務し、野生動物の保護管理や知床五湖の利用調整地区の制度運用を経て、21年より公園事業推進プロジェクトリーダー。知床国立公園内のマイカー交通規制などを行う「Shiretoko Autumn Bus Days」を担当。「移動を、サービスに。」をコンセプトに、20年、21年の10月にそれぞれ3日間ずつ開催し、22年も継続される予定。

トーク2　秋葉　圭太　さん

■ 合意形成は言葉を重ねること ■

国立公園管理に関する仕事をしており、合意形成や協働という言葉がよく出ますが、実際どうやっているのかを私の立場からお話します。「公園づくり」をキーワードに仕事をすると、地域との関わりが年々増えていきます。公園の話が公園の中、保護区の話が保護区の中では完結しません。国立公園や世界遺産を保全したい、野生動物との軋轢対策をしたい、ヒグマを守りたいなどの動機で知床財団に入る人が多く、それが私たちの大きな目標ですが、その上で絶対に欠かせないのが合意形成と連携、協働だと思います。

知床では観光や利用に伴って発生する渋滞混雑やヒグマの問題があります。環境への影響や人身事故を含めた安全対策もあり、利用がなかなか進まない、自由がないという見方もできます。今の問題は、ほぼ道路の沿線で起きていることに着目しています。利用が悪いのではなく、利用の仕組みの問題。国立公園の主要な場所で、ほぼ全ての自家用車の利用を規制し、アクセスをきちんとマネージする社会実験に取り組んでいます。マイカー規制という言葉を聞いたことがあると思いますが、それの発展形と言っています。実は知床財団ができた30年前から必要だと言われてきましたが、できなかったことです。やればやるほど難度の高いことがわかります。

合意形成は実際に何をやるかというと、言葉を重ねるしかない。よく協議会を作って関係者で集まりましょうと言って会議をやります。昨年私もずいぶんやりました。会議ではいろいろな意見をいただきます。よくあるのは、不安だからもっとゆっくりやってほしい、これでは時間、説明が足りない、データが足りない、責任は誰がとるのかなど。会議では本音を話せないから個別にやってくれと言われて、では個別にやりましょうと言ってやると、絶対に出るのは、俺は聞いていないという話。私はいいけれど、○○さんは反対だという話も。最後にやっぱりみんなの意見を聞いた方がいいのではないかと言われ、また会議に戻る。こんなことをグルグルやります。もう少しいい方法があれば教えていただきたいです。

グローバルな価値観とローカルな価値観があり、国と地方の関係と言っていいかもしれません。保護や保全の考え方は極めてグローバル。世界遺産がまさにそうです。ローカルな価値観は、それとは違う価値観で動いているのをよく知っておく必要があるかもしれないです。官と民の違い、保全と利用というよくある対立、価値観の違い。役所の縦割りの壁もあります。もしくは科学と感情があって、私たちも自分の立ち位置について自覚を持った方がよい。

協働の話も、関係者がみんな集まって一緒にやるとなるとそれっぽく感じますが、最近本当にそうなのか？と思います。自分たちに十分なリソースやお金や権限や能力があれば、別に協働する必要はない。しかし実際には目標達成や課題解決を進めるリソースが全然ない。いいことをやっているので皆さん協力してください、関心を持ってください、という言い方の協働は何か違うのではないか。順番が逆なのではないか。その前に公園外や地域の課題を、自分たちが関心を持って理解する必要があるのではないか。当たり前の話ですが、環境保全に関心がある方やそのような機関で働こうとしている方に、こんな自覚が必要ではないかと思います。地域の今の一番の課題はクマでも自然保護でもなく、少子高齢化の中で、地域や地域のコミュニティがきちんと生き残れるかどうかだと思います。自然環境保全をテーマに働く人間も、こんな考え方に変わっていかなければいけないと思います。

■ 入り口が観光、出口に保全 ■

なかなか進まない公園内のマイカー規制を考える時、規制という言葉が入り、場合によっては「利用は環境に悪いから規制すればいいでしょ」という考え方が見える。そうではなく、これをやると圧倒的に魅力が高まる、観光サービスをやると切り替えないと多分理解を得られない。これまでは出口と入り口が逆だったのではないかと思いました。入り口が観光、地域の魅力アップで、結果として出口に保全があればいいと思います。シャトルバスは単なる代替輸送の手段ではなく、観光プログラム。クマの話で言えば、野生動物をきちんと見られる仕組みとセットでやらないと、社会的に受容されないのではないかと考えています。考え方を転換をして新しいチャレンジをしていますが前途多難。どれくらい時間がかかるかわかりません。クマを守りたい、環境保全したい、だからやりましょうという言い方はあまりしていません。移動をいいサービスにしていきませんか、それによっていい地域づくりをしませんかという切り口で、皆さんと一緒にやっていけないかと思っています。

昔の日本の言葉で「結」という言葉があります。家の屋根を葺き替えるのにみんな総出で葺き替えること。みんなのために自分たちの労力を貸していく。それをお互いにやっていく。公園管理も協働もこんな考え方が大事なのではないかと、当たり前のようなことに今更気付き、仕事をしています。自然のことに興味を持って何かを変えていきたいと思えば、公園外のこと、地域のこと、社会のことに関心を持たなければいけないというのが私の結論です。専門性を磨くことや、自分の興味関心を掘り下げるのもとても大事ですが、実務の立場で言えば、それだけではいけない。自然を守りたければ、それ以外のことに力を入れていかなければいけないと考えています。

三浦　一輝 さん

知床博物館学芸員。淡水魚類や淡水二枚貝などの動物を担当。北海道大学大学院環境科学院の修士課程を修了後、日本学術振興会特別研究員を経て、2019年４月より現職。20年３月に博士（環境科学）を取得。自身の研究に加え、地域の人たちと協力した博物館活動に従事する。
担当した知床博物館の第41回特別展「鮭と川と人と」には、記録をとってから歴代２番目の1304人が来場したほか、サケの遡上観察会や特別講演会なども開催した。

トーク3　三浦　一輝　さん

■ 子供にとっては、近くて遠い大自然 ■

知床博物館の学芸員をしています。博物館の学芸員という仕事に馴染みのない方もいると思いますが、普段は学校の出前授業、調査研究、展示、講演会などを行うほか、事務や運営など基本的な業務も行っています。今日は、私が昨年度担当した特別展について紹介します。仕事の一部を紹介するという意味と、地域博物館の学芸員がどんな問題意識を持って教育普及に携わっているか、展示を介してどのように問題解決にアプローチしているかを紹介できたらと思います。

特別展は「鮭と川と人と」というタイトルで、2020年10月～12月に行いました。サケが大昔から繰り返し川を遡上することで支えてきた自然、文化、歴史を実感するというコンセプトで、対象は町民プラス観光客。子供から大人まで楽しめるものを、と準備をしました。知床はヒグマなど哺乳類が有名ですが、サケも重要な生き物です。斜里町は市町村別で18年間サケの漁獲量日本一を誇っています。極めて重要な産業ですが、サケの漁獲量は年々減少傾向です。斜里町でも2013年には2万トンを超えていた漁獲量が、1万トン以下に減っています。少しでも地域を盛り上げられないかとの思いがありました。

その他にも大事な理由があります。サケは海の姿と川の姿は全然違います。地元の子供達にどちらがサケかを聞いてみると、海の姿を選ぶ子が圧倒的に多いです。これは地元では当たり前で、スーパーに並んでいたり、家庭によっては丸ごと一匹もらったりすることも知床では普通にある地域であるからだと思います。子供たちは川のサケはあまり見たことがありません。知床は自然に恵まれているので、子供達は大自然の中で過ごしていると思うかもしれませんが、外で遊ぶような子供は実は少ないです。自然や川にはなかなか近付かないし、近づけない。ゲームやスマホが普及したこともあり、子供たちにとって知床は近くて遠い自然です。

またサケが川にのぼることが、知床が世界遺産になった重要な理由の一つにもなっています。森と海をつなげる存在であるためです。サケが海から川をのぼることで、知床を特徴づけるヒグマやオオワシ、オジロワシなどの重要な餌になっています。また、知床を一歩出ても、北海道の文化や歴史の形成にもサケがとても重要な役割を果たしてきました。これらの重要性を、大人から子供まで体験とともに伝えたいと思ってテーマを決めました。

■ 観覧者が入り込める空間づくりを ■

特別展会場は大体10m×10mのホールです。自動ドアの風除室には漁業の写真を展示し、手前から奥に向かってだんだん海から陸に寄っていく構造にしました。会場に入ると展示兼体験コーナーのボールプールの川が見えます。青いボールは買いましたが、サケの人形は手作り。人形は全部違う模様で職員さんが作ってくれました。自然界の個性あるサケと一緒です。川の右に進むと自然のコーナー。サケの仲間の歴史から始まり、約300万年前の日本で見つかっている最古のサケの仲間の化石の頭や、水槽で生きたサケの仲間も展示しました。泳いでいるのはヤマメとアメマス。真ん中に刺さっている黒い貝はカワシンジュガイという貝で、幼生の時にヤマメやアメマスというサケの仲間に寄生をしないと大人になれない貝です。できるだけ文字を減らしたかったので、iPadで簡単に水槽の中にいる生き物の解説をして、子供達がピコピコ押せるようにしました。

背後には金色のサケの剥製を展示しました。この剥製の色は空想上の色ではなく、本当に斜里で獲れた金のサケです。時々、このような色彩変異の個体が獲れることがあります。剥製は地元の漁業者さんにお借りしました。他にニジマス、アメマス、オショロコマ、ヤマメ、サクラマス。うちの博物館のもので、幻の魚と呼ばれているイトウの剥製も展示しました。イトウは現在でも斜里川に少し生息しています。展示会場で本物の川に入ることはできませんが、カラフトマスなどと一緒に泳げる擬似体験ができるようVRも設置しました。アイヌ文化のコーナーでは、アイヌの伝統漁であるマレクの映像を紹介し、実際に当時使われていたマレクも併せて展示しました。産業のブースでは明治期に生産されていた本物の缶詰のラベルを展示。北海道は缶詰産業のスタートの地として重要な場所で、特にサケマスの缶詰は戦争時の携帯食になったり、輸出されたりして産業が発展しました。

この特別展でこだわった点はとにかく空間づくり。一般的な博物館の展示は、文字が並んでガラスケースに入っていることが多いですが、地域の小さい博物館の特性を生かし、サケが川を遡っている空間の中に、観覧者が自ら入り込めるような空間を目指しました。時代を超えたサケの役割、重要性を体感して欲しい。さらには、擬似体験ではありますが、子供たちが川のサケと一緒に泳いだり、遊んだりする経験を通して近くて遠い自然に近づき、将来地元のサケや自然に興味を持ってもらえたらと思います。

サケは産業上重要な生き物で、多くの関係機関にご協力いただきました。展示を創る上で気を付けたこととしては、見る人の誤解を少なくするように、誰も否定しない展示づくりに気を使いました。例えば、ダムがサケの遡上を止めていると紹介すれば、悪く言ってしまえば、河川管理者の方を否定してしまうことになる。そういった問題提起は展示ではなく、別の機会にということで、できるだけ誤解を招かない内容にすることを心がけました。展示だけでなく、現地でのサケの観察会なども行いましたが、周りの機関に事前に説明をし、法的な手続きなどをきちんととることも気を使いました。海のサケの生態などは、私よりもずっと詳しい人が多い町です。そんな人でも楽しめるよう、私の元々の専門に近い川のサケや文化、産業に着目して作りました。知床は観光客、大人対象のイベントが多いと思います。一方で私は、地域博物館の学芸員として、子供から大人まで、近くて遠い自然と地域の人の橋渡しをすることが重要な仕事であると考えています。

コーディネーター
敷田　麻実 さん

北陸先端科学技術大学院大学教授。知床世界遺産科学委員会適正利用・エコツーリズムWG座長。
著書に「地域資源を守って生かすエコツーリズム」（編著・講談社）、「生物文化多様性」（編著・講談社）など

トークセッション　（まとめ）

敷田：村上さんの活動ではクマ活が最初に出てきました。始められたのはいつでしたっけ？
村上：2020年6月が１回目です。
敷田：秋葉さん、活動ご存知でした？
秋葉：もちろんです。知床財団でも共感を持って一緒にやっているメンバーが多い。むしろ私たちよりいろいろな意味で先に進んでいると感じています。
敷田：いろいろな意味のいろいろとは？
秋葉：協働で一緒にやりましょうと言って、私たちがチラシを刷って配っても10人くらいしか集まらないのですが、村上さんがつなぐと80人集まるという。巻き込み方や進め方が今までと違うと感じています。
敷田：本来は秋葉さんのところがやる活動を村上さんがやっている。村上さん、何か工夫していることはありますか。
村上：私が実際に知床財団の皆さんにお世話になる中で、専門家だけが動物を守る、自然環境を守ることに従事している。ずっと専門の知識はいらないのにと思って見てきました。お手伝いをする、目の前のゴミを一つ拾うという簡単なアクションを日常から。友達がいたらより楽しいよね、くらいのハードルが低いところでぐるぐる滑車を回している状態です。人が集まりやすいのはハードルの低さと、私が若くて元気ハツラツにやっているので楽しそうと感じる人が多いのだと思います。
敷田：村上さんが楽しそうにやっているのは、一つの魅力だと思います。ともすれば自然保護や環境保全は専門家や分かった人がやるイメージがありますが、ハードルが低いのは、もしかしたら私も一緒にできるのかなということに通じるのだと思います。三浦さん、サケの展示はまさにハードルを下げて漁師の人たちにも楽しんでいただけたとのことですが、村上さんの活動にアドバイスできることがあれば。
三浦：アドバイスできるほどではないのですが、博物館でも同じように楽しそうに見せることの重要性を感じています。ゴミ問題と押し出してしまうととても重たい問題。サケの資源量が減っている問題、河川工作物の問題なども、重たい話で押し出してしまうと、途端に地元の人が耳を傾けてくれなくなってしまう傾向があります。ちゃんと紐解けば重たいのですが、楽しそうにやっているのは私たちも見習わなければならない。
　博物館としても重たすぎるテーマを直球でぶつけるのではなく、まず楽しんで興味を持ってもらうところからというのは気を使って、共通点があるなと思いました。

楽しみに寄り添うことが大切

敷田：秋葉さん、ヒグマは非常に危険な動物で、人が接近するのは大変危ないことだと警鐘を与えるタイプの仕事をされてきましたが、楽しい活動の方がいいのでは？というお話がありました。工夫や悩みをお話いただければ。
秋葉：全くその通りだと思います。伝えることと伝わることは別だと思います。何かルールを伝えたい、知って欲しい、守ってほしい時によくやるのがルールの手引きなどのパンフレットを作って配って、それを読みますか？という話です。
　観光やツーリズムは楽しみベースの活動ですので、活動原理や行動原理に寄り添ったものを作らないと、そもそも見てくれない。ビジターセンターの運営でも、楽しいものや面白いもの、必要とされているものをやらないと。そこで入り口観光、出口が保全のキーワードが出てきます。そもそも来てくれないと意味がない、伝わらないとよく言います。ニーズや楽しみに寄り添う。行動原理に沿った管理をしないとひとり相撲になる。体

現している村上さんを尊敬しています。
敷田：尊敬されている村上さん、何か秋葉さんにアドバイスがありますか。
村上：いやいや、ないです。私のやっていることは、秋葉さんはじめ皆さんが懇切丁寧にやってきたことを、どう噛み砕いて世間に出していくかだと思います。私は表に出るのが得意な人間で、それを楽しんでできる人間なので。私は詳しいお話ができないので、もっとコアな話は知床財団の皆さんに回すなど、役割分担ではないかと思います。
敷田：役割分担は非常に重要。全員が同じことをするより、それぞれ得意なことをすることで、全体にいろいろなことが伝わっていく。少し大きい話に戻しますが、三浦さん、知床博物館は何の役割を分担しているのでしょうか。
三浦：知床博物館が大きく担っているのは、地元の子供たち、大人たち、学校の出前授業なども含めた社会教育の部分です。当館は基本的には町立博物館ですので町民を第一に。子供たちも一緒に楽しめるところは、博物館が担っている部分だと思います。

ちゃんと言葉にして、やってみる

敷田：「楽しい活動を通して自然に興味を持った人が、ステップアップしていけるものがありますか？」と、チャットでポイントを突いた質問をいただきました。知床五湖のガイドもしている村上さんに聞いてみたいと思います。
村上：ゴミ拾いプロジェクトも前はゴミを拾うだけで解散していましたが、ゴミを拾った後に今日何を拾いましたか？どんなことを感じましたか？など、感想の言い合いタイムを5分間だけとるようにしました。行動だけでなく、そこから何を感じて次はどんな行動を起こしたいなど、興味関心や感情をちゃんと自分の言葉にするところからアクションは始まると思います。ＳＮＳに感想を載せてみたりなど、参加してやったことを言葉にして、言葉にしたことをやってみてと繰り返していくことで、どんどんその方向に進んでいくのではないかと思います。
敷田：やったことだけでなく、それを言葉にする。難しい言葉で言語化と言いますが、意味を伝えていくことが重要とのメッセージだと思います。三浦さんのところも、モノからモノの持つ意味をお伝えになっていると思いますが。
三浦：うちができていない大きな課題ですが、伝える場は一生懸命提供しています。博物館の講演会、講座など場を提供するまではできていますが、もう一歩踏み込んで、市民の人たちと一緒に何かを調べたり、一緒に活動したり、最近周囲で行われているサケやマスが遡上できるよう簡単な魚道を作るような活動も一緒にできたらいいなと思っていますが、まだできてはいません。
敷田：すでにお気づきになっているのは非常に良いこと。それに気づかずにやっている博物館や展示スペースが多い中で、一歩でも近づこうと努力されていることが伝わったと思います。秋葉さん、なぜ知床の自然を伝えなければいけないのですか？なぜ知床の自然の価値を言葉にしないといけないのですか？伝えなくても楽しいだけではダメですか？
秋葉：楽しみの中身も変わってきていると思います。楽しさは快楽や消費的なものだけではないと思いますし、何かに貢献する、自分を表現する、人の役に立つことも楽しみで、楽しみが保全に役立つ道筋はそこら辺にもあると思います。

ルールや規制があることで、圧倒的に楽しみが広がる絵を描く

敷田：チャットで「知床はこの先どうなっていくのでしょう？」という質問が来ています。「ルールを作るのは大事ですが、規則ばかりできあがると魅力がなくなるのではないですか？」という質問も。楽しみに転換すればいいのか、一方で規則はどうなるのかということ。秋葉さんにお答えいただければ。
秋葉：私の仕事の中心的テーマです。どんどんあれやるな、これやるなと説教ばかり、規制ばかりの知床になっていくのではないかという危機感、実感が私にもあります。ルールや規制は必要だと思います。保護区のツーリズムは、ある種のルールや規制があるから際立つし、成り立つと思います。
　問題はルールや規制の中身が人の楽しみに寄り添っていないこと。あれするな、これするなという説教ベースの規制は、ことごとく受け入れられない。ルールや規制は必要ですが、それが圧倒的に利用の体験の質を向上させる、自由度を上げるものでなければならないというのが、知床五湖の仕組みを10年ほどやって思った一つの結論です。

クマのルールでも近づくなと言いますが、ルールがないと逆に観光資源として見せることができない。ルールがあることで、今まで資源化できなかったものができるようになる。ルールや規制があることで、圧倒的に楽しみや自由度が広がる絵を描いていかなければいけないと思います。

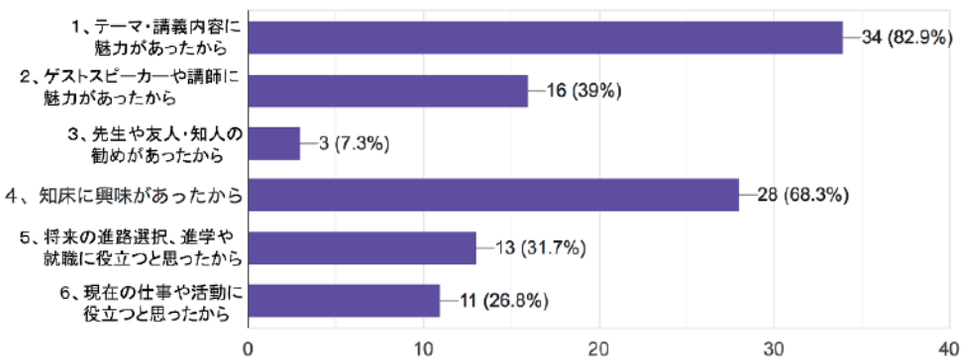
伝えた先で実現したいことは？

敷田：最後に３人が伝えた先で実現したいこと、こんな知床にしていきたいということを、もう一度強調して答えていただきたいと思います。秋葉さんから。
秋葉：明るく楽しめる場所であってほしいです。対立は距離感というかフェーズの問題で、焦点を広げていけばそうでもない。自分の子供たちにとっても楽しめる場所であって欲しい。私自身は自然の中で好き勝手やり、悪いこともたくさんしましたが、そんな原体験から楽しみや気づきや厳しさを教えてもらった。自然は学校みたいなもので、それを残していきたいのが一つの仕事の目標。そのためにフィールドをきちんと守る、開くのがライフワークになると思います。
伝えることの重要性、その先に何があるのかずっと考えていました。レクチャーみたいなことをずいぶんやりますが、それがうまくいったか、いかなかったかの指標は、相手が変わるかどうかだと思います。相手の行動が変わらなければ、意味がなかったと言ってもいいと思います。それによって実は自分が変わることもある。何かを伝えることは、自分と相手が変わることで、そこに重要性があると思います。
三浦：大きく二つあります。一つは専門家の立ち位置で、今ある自然をできる限りより良い形で残していくということ。知床だけでなく、広い意味で北海道、日本、世界でもそうだと思います。そのためにどんな教育普及や活動をするか、日々現場の中で考えています。もう一つは、知床博物館は町の機関なので、町を今後どう維持し、盛り上げていくかという点。観光客はたくさん来てくださるが、人口自体は減っています。子供たちも高校くらいになったら、多くが町外に出てしまう。当館では最近は特に子供たちの教育活動に力を入れていますが、子供たちに自分の町の自然や歴史に誇りを持ってもらいたい。世界遺産の町で、ここは暮らしにくかったけれどここはすごくいいという部分をきちんと持って、町外に一度出てもまた帰って来てくれる子や移り住んでくれる人が増えるように、魅力づくりを大事にしています。
村上：なぜ知床を守りたいかといったら、私がいちビジターであり続けたいから。自転車に乗り、山に登るのが好きですが、最近楽しめなくなっている。なぜかと言うと事情を知ってしまったから。ヒグマ問題やごみが目につくと、自転車を漕いでいても悶々とする自分がいる。きっとそれは観光客にも伝わると思うし、知床の総体的な評価につながっていく。
その中で目の前のゴミやヒグマ問題をほったらかしにすることは私にはもうできない。一人でやることもできない。仲間集めが重要で、一緒に共感し、一緒に頑張っていこうという仲間が欲しいのだと思います。ホームができたら、ゴミ問題やクマ問題が現実的にパッと好転することはなくとも、少しでも気が和らいで知床のことを好きになれると思います。
敷田：おそらく知床バンザイの人が接遇するより、悩みの中で生きている人に迎えられる方が、これからの観光客は良い印象を持って帰られると思います。
自然も人も残そうという、知床の頼もしい若手３人からお話を聞くことができました。このような人たちに恵まれた知床が羨ましいと思いますし、この３人がいる限り知床は安心だと思います。

トークセッションのアンケート結果

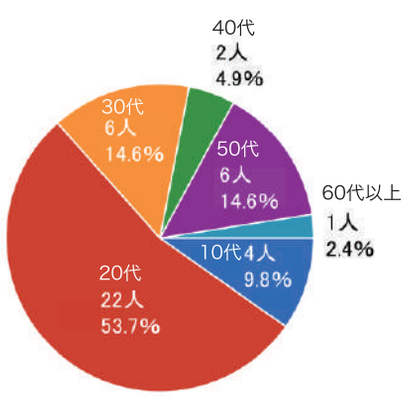
今回の参加者51人のうち、41人からアンケートのご協力をいただきました。
集計結果の概要や自由回答の一部を御ご紹介します。

参加を決めた理由は何ですか？（複数回答可）

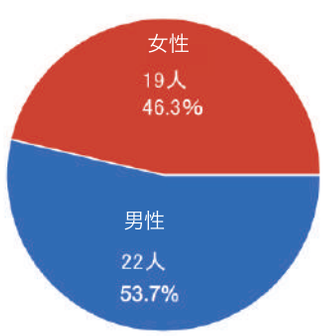


参加を決めた理由は、「テーマ・講義内容に魅力があったから」が一番多く、次に「知床に興味があったから」でした。過去のネイチャーキャンパスとほぼ同様の結果になりました。

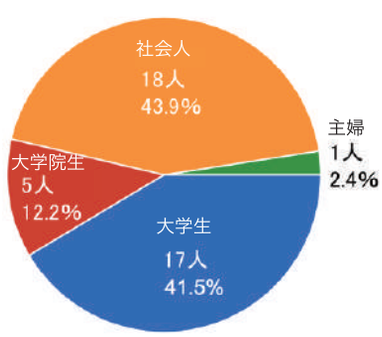
回答いただいた方について



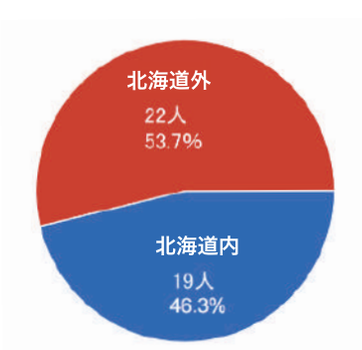
年齢



性別



所属



住所

41人の回答者のうち、大学生・大学院生が22人、社会人・主婦が19人でした。年齢は20代が半数以上を占めました。

住所は北海道外でいうと、東京都が6人、愛知県が4人、茨城県と神奈川県が2人、千葉県、埼玉県、山梨県、岐阜県、大阪府、兵庫県、鹿児島県が１人ずつ。全国各地からご参加いただきました。

印象に残った内容とその理由（自由記述）

自由記述欄には、たくさんのご感想をいただきました。
一部をご紹介します。

保全について考えるならばそれ以外のことにも目を向けていかなくてはいけないという内容。広い視野、異なる切り口、視点で考えていくことが必要であるという意見がとても新鮮に感じ、自分が少し凝り固まった考えを持っていると気づかされたから。

「入口は観光、出口に保全」という言葉は印象に残った。自然の大切さみたいなものを伝えるためには、まずは「なんだか楽しい」という感覚が必要なんだなとしみじみ実感した。

普段は公園管理の現場で行政寄りの視点から研究をしているので、民間企業や地元に密着した博物館という、普段自分が関わる人々とは異なる立場の方の考えも聞くことができて視野が広がった。

私の興味関心の範囲が、まさに秋葉様がお話された内容でした。現場の臨場感もさることながら、その現場での事象を一般化されてお話いただいたので、自らの個別事例について置き換えることができ、深く考えることができました。特に、合意形成の実際について、会議・協議会の過密なスケジュール、地域住民からの無理難題や矛盾する意見などは現場の熱気が伝わりましたし、それらをどのように解決していくのか、どのようにマインドセットを変化させていくのか、という冷静な視点もお話しいただき非常に勉強になりました。「入り口は観光、出口に保全！」大変共感しました。課題解決優先から価値創造型への転換や規制モデルからの脱却は、日本全国の現場の今後の大きな潮流になっていくといいなと思います。

お三方のお話すべて、切り口や場面は違っても根っこがつながっていて、とても面白かったです。 まず楽しむことから入って、そして地域の問題の解決につながっていくという観点とその様々な実践について学ばせていただきました。 ありがとうございました！

保全と地域の問題は深い関わりがあるという話が、自然の保全に興味のある自分にとってはとても考えさせられる内容だった。

スピーカーのお三方のそれぞれの違った立場や視点から、知床の自然という一つのトークテーマで話されていてとても面白い学びになった。個人的には秋葉さんの官と民のお話が自分としても身近に感じる機会があり考え深かったので、また機会があればもう少しじっくりとお聞きしたいと思いました。

小さな町の中での様々な難しさはあるだろうが、町立博物館、民間企業、財団法人、などそれぞれ全く異なる立場の人たちがお互いを尊敬し合いながら、役割分担もしつつ活動を進めていることは、今の知床を作り上げている良い要因なのだと思う。

地域の困りごとや課題を1番に大切にする、ということが印象的で大事にしたいな、と思いました。手作り感あふれつつよく考えられた博物館も、とてもいいなあと思いました。

『近くて遠い自然』、『入口は観光、出口は保全』という２つのキーワードが特に印象に残っています。 観光に加えて、地元へ向けた活動も想像以上に重要であることや、ビジョンの共有へつなげる努力や難しさが伝わってきたため、印象に残っています。

博物館の特別展があれほど地域や来館者に寄り添って考えられたものとは思わなかったので嬉しかったです。展示見に行きます。

コーディネーター敷田さんのお話がものすごくお上手だと感じ、大変印象に残った。 聴講者が自然と参加者にさせられるような誘い掛けがあり、自分もこの場を作る1人なんだという感覚を持ちながら参加できた。 自然に関わる活動も含め全ての活動において、新たに人とつながることはとても大事なので、このような力のある方の存在は大変重要だと思う。また、今後も何か企画があるときはぜひまたこの方のコーディネートでお話を伺うことができたら嬉しい。

以前知床に行ったことがあったが、それ以前に今日のように知床について知っていれば、もっと深い視線で知床の自然について考えることができたのになともどかしく思った。今日の話を経て、またぜひ知床へ行きたいと改めて強く思った。

秋葉さんの話を聞いて。 知床にとってクマは観光資源でもあるが、観光客とクマとの接触を減らすような働きかけがあるように思い、その矛盾点について知床にいる方々はどのように考えているのか気になっていた。秋葉さんの、「知床での規制やルールは、保護地区である知床での経験をより良くするようなもの」「ルールがあるからクマが観光資源になり得る」という話を聞いて少し納得した。以前行った自分が冒頭の疑問を持ったように、滞在者に対してそこをどう伝えるか考えてらっしゃると思うが、敷田さんが仰った通り、思考停止せずに悩みを持っている人に迎えられる方が滞在者としても“考えなければならない”という意識が持てて良い。

今後参加してみたいと思う分野やテーマ（自由記述）

・地元のガイド事業者や観光協会の方が、知床の観光のあり方についてどんなビジョンを持っているのか聞きたい。
・ヒグマ、アイヌ、レッドリストに載るような希少野生動植物、人間と自然の軋轢と共生
・プロジェクトの企画・立案から実行までを事例を通して紹介してほしい。
・知床の地元民が知床が抱える問題をどう受け止めているのかを聞いてみたい。
・知床の海・海洋資源の変化
・生物文化多様性、地元産業（漁業など）に従事している方の自然・保全に対する意見
・トコさん、知床五湖のガイド認定制度、知床の自然利用のこれまで、などが気になる。
・他の場所での自然利用やエコツアー利用の参考になるような内容も聞きたい。
・知床で問題となっている観光客やエゾシカについてのお話を聞いてみたいです
・知床で漁業・農業・林業・牧畜業を営んでおられる方々の声が聞きたい。
・国立公園整備に日々尽力されている環境省職員のお話を聞きたい

■ 理事会報告

＜令和３年度第３回理事会＞
開催日時：2021 年 11 月 2 日（火）午後 7 時～
開催方法：オンライン会議システムを使った Web 理事会として開催

報告事項
1　代表理事・業務執行理事の業務報告
2　賛助会員の加入状況・募金の状況
3　「知床ネイチャーキャンパス presents オンライントークセッション」の開催結果について
4　「野生動物保護管理教育プログラム検討会」の検討状況について

協議事項
1　今年度の知床ネイチャーキャンパスの開催案について
2　知床のカリキュラムと教育体制構築へのロードマップ について

＜令和３年度第４回理事会＞
開催日時：2021 年 11 月 23 日（火）午前 10 時～
開催方法：オンライン会議システムを使った Web 理事会として開催

報告事項
1　知床ネイチャーキャンパス・リカレント 2022 の募集について

協議事項
1　知床のカリキュラムと教育体制構築へのロードマップ についてーその２

＜令和３年度第５回理事会＞
開催日時：2022 年 1 月 22 日（土）午前 10 時～
開催方法：オンライン会議システムを使った Web 理事会として開催

報告事項
1　第 11 回専門委員会の開催結果について
2　第５回野生動物保護管理教育プログラム検討会への出席報告
3　2022 年度地球環境基金助成金交付申請について
4　内閣府立入検査（12 月 16 日）の結果について

協議事項
1　知床のカリキュラムと教育体制構築へのロードマップ についてーその３
2　支援獲得戦略と獲得体制の検討

■ 計画策定専門委員会報告

＜第 11 回計画策定専門委員会＞
開催日時：2022 年 1 月 11 日（火）午後 5 時～
開催方法：オンライン会議（Zoom）による

報告事項
1　2021 年度の活動状況中間報告

協議事項
1　知床で行う教育プログラムと実施体制
2　今後のロードマップについて
3　知床ネイチャーキャンパス・リカレント 2022 の開催について

知床自然大学院大学設立財団は、活動を支援してくださる **賛助会員、寄附金** を募集しています

当財団の事業は皆様から寄せられた浄財によって実施されています。何卒、一層のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。なお、当財団は内閣総理大臣の認定を受けた公益財団法人です。当財団への寄付金・賛助会費は、特定公益増進法人に対する寄付金として税法上の優遇措置が適用されます。法人の皆様には損金算入限度額の優遇措置が、個人の方には所得税の税額控除（または寄付金控除）の対象となります。また遺贈も承っております。詳しくはホームページ、または当財団事務局までお問い合わせください。

■賛助会員とは
この財団の目的に賛同する個人・団体・法人が会費を通じて支援するものです。

■会員の年会費　※年度ごとの納入となります。
個人会員：5,000円
団体会員：10,000円
法人会員：20,000円
法人特別会員：100,000円

■加入申し込み方法
「申込書」と「郵便振替用紙」をご使用ください。これらは当財団ホームページからプリントアウトできます（入金は右記口座への入金でも受付しています）

知床自然大学院大学設立財団ホームページ
賛助会員・寄付金募集ページ
http://shiretoko-u.jp/supporter/

■賛助会員の特典
当財団のニュースレターや絵はがき、講演会やネイチャーキャンパス等の案内情報をお送りします。

■寄付金について
寄付金も随時募集しています。賛助会員加入同様にお申し込みください。

■税制優遇について
当財団への寄付金・賛助会費には税制上の優遇措置があります。

■主な入金口座について
ゆうちょ銀行　記号19940（普）10138691
（※他の金融機関から　店名九九八　番号1013869）

北洋銀行斜里支店	店番452	（普）3119440
北海道銀行斜里支店	店番904	（普）0530326
網走信金斜里支店	店番003	（普）0284957
大地みらい信金羅臼支店	店番003	（普）1072873

設立財団ニュースレター　第２５号

発行　公益財団法人知床自然大学院大学設立財団
〒099-4117　北海道斜里郡斜里町青葉町 28-10
TEL　0152-26-7770　FAX　0152-26-7773　E-mail　sizendaigaku@wine.plala.or.jp
Web　http://www.shiretoko-u.jp

発行日　2022年３月１日